

色覚特性（かつての色盲・色弱）について

色覚特性とは？

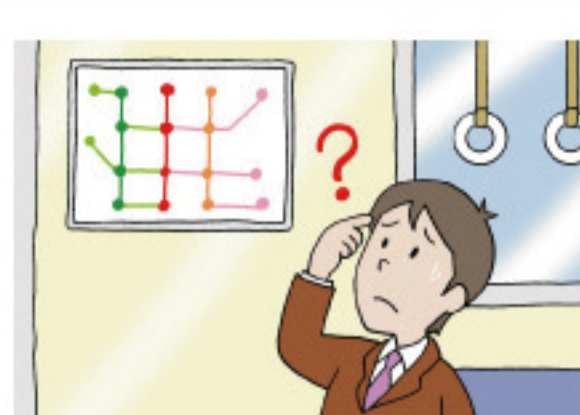
「色覚特性」はかつては「色盲」や「色弱」と呼ばれていました。友人やパートナーの中で、実は色盲もしくは、色弱だという方がいらっしゃるのではないのでしょうか？

色覚特性（かつての色盲・色弱）とは目の特性の一つ。色を識別する錐体細胞が色の認識・識別が多数派と違うタイプだということです。一般的に赤緑色弱といわれているのは赤と緑の区別がつきにくいタイプで、世界的にはおよそ2億5000万人の色覚特性を持つ者が存在するといわれています。



色覚特性の方が日常生活で困っていること

「この色は何色に見えるの？ あれは？」一般の方がかつての色盲や色弱の特性を持っている人に対して尋ねる第一声です。かつての色盲や色弱の人は苦手な色か、分かる色か、しばらく考えてから答えます。また、「この2つの服の色は同じなの？」「この路線図…色がごちゃごちゃしてわかりにくいな」など、色覚特性の人たちは日常生活の中で、様々なことに不便を感じているのです。



地下鉄の路線図が見えにくい



信号で色の区別がつかない

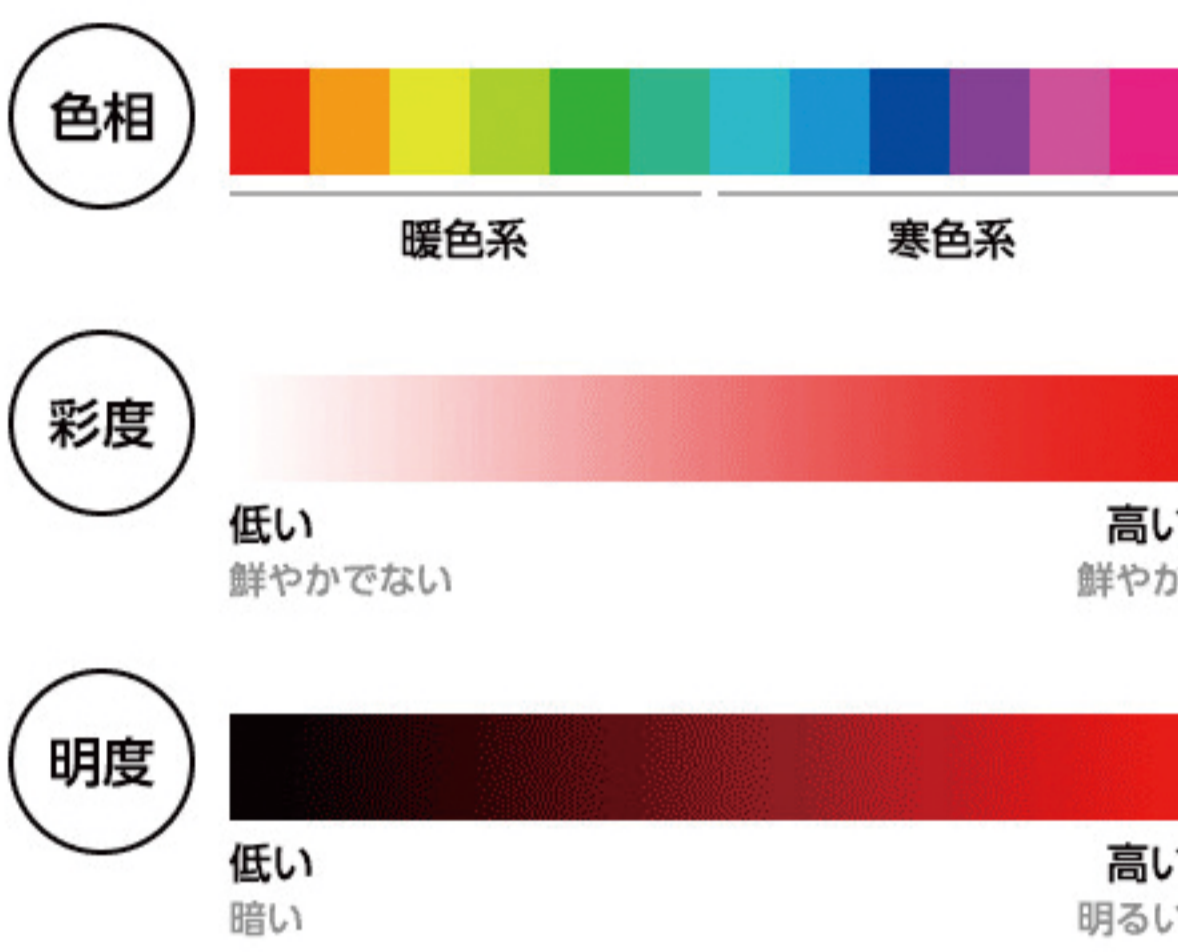
どうして瞳で色が分かるのか

色を感じ表現する要素には、「鮮やかさの“彩度”」「明るさの“明度”」「色合いの“色相”」という3つの要素があります。

瞳は「色相」「彩度」「明度」の3要素で色を読み取ります。

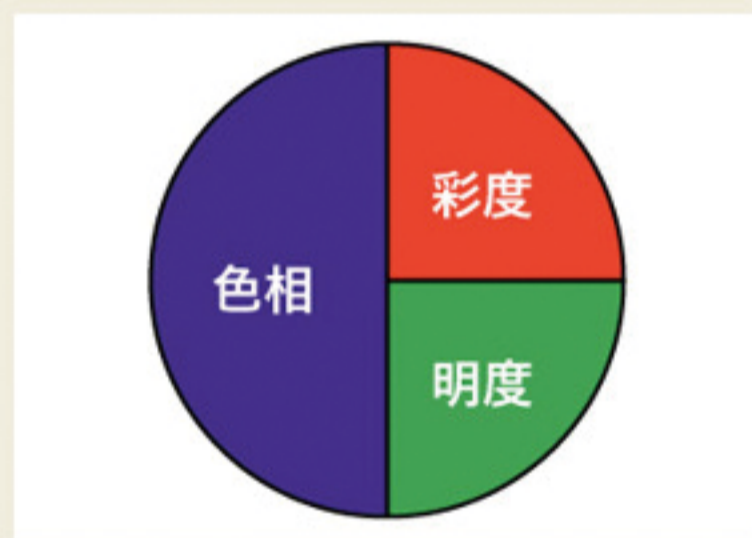
色に対する感じ方は「色相」「彩度」「明度」の割合の違いで人それぞれ異なり、色の見え方や感じ方も違います。

図のように「色相」が色を感じる上で最も大きな要素といわれおり、色の見え方の違いが大きいと「明るさ」や「鮮やかさ」で色を判断するようになるため、特定の色の見分けが困難になります。



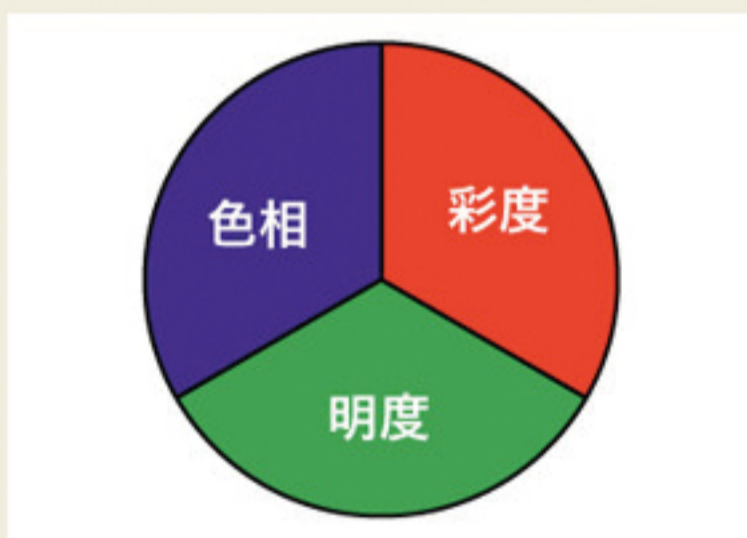
一般色覚の人

色相の割合が高く、色合いで色を判断できる状態。



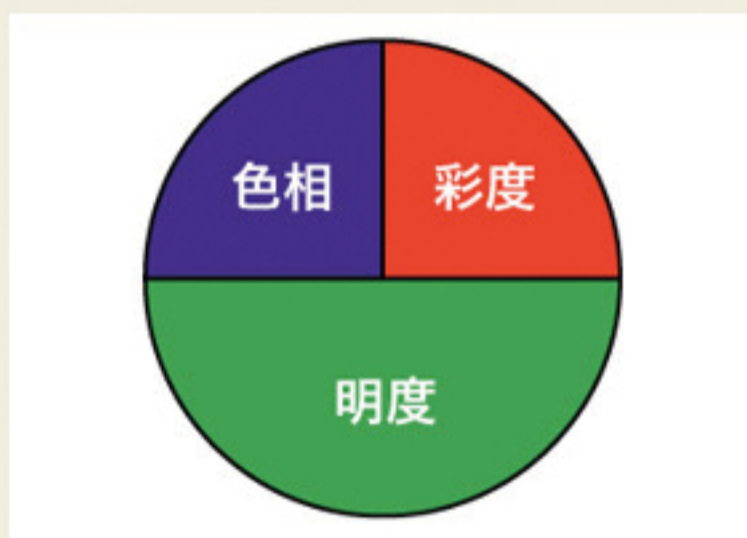
少し違う場合

色を感じる3要素のうち、彩度と明度の比率が高くなり、色相で色を識別する比率が低くなっています。



大きく違う場合

さらに色相の比率が低くなり、明るさや鮮やかさで色を識別する傾向が強くなるといわれています。



色覚特性の人は“Super Green Eyes”の持ち主！

色覚特性（かつての色盲・色弱）の人は微妙な「緑」の違いを容易に識別できるといわれています。草むらの虫、山の中の山菜、密林の中のカメレオンなど。新緑の季節の美しさは言葉になりません。逆に「赤」が見えにくいのです。「赤」が鮮やかに見えない分「緑」が神のプレゼントのごとくきれいに見えるのではないのでしょうか。様々な「緑」が識別できる世界もステキですね。



ほかにもこんなことで困っている

色も認識しにくい組み合わせがあります。赤と緑、青と紫の色の組み合わせやパステルカラーのピンクや紫などの色も見分けにくい色の組み合わせです。その他にも日常生活の中で、不便を感じていることをご紹介します。

※これらのことは全ての色覚異常（かつての色盲・色弱）の人たちにあてはまるわけではありません。



色覚特性チェックリスト

色覚特性チェックリスト

- 信号の色が見分けにくい。または識別できないので並び順で覚えている。
- 夜、車の運転をすると、信号と水銀灯が区別しづらい。
- 車のブレーキランプが見づらい。
- 晴れているのか、うす曇りなのか天気がわかりづらい。
- コーヒー牛乳と野菜ジュースを間違えたりする。
- 焼き肉を食べるとき、焼けた肉と生肉を間違える。
- 色の違うソックスを片方ずつ履いていて気付かなかった。
- ゴルフで芝生の上に置いたマーカーが見えなかった。
- 麻雀で赤い文字が黒にしか見えない。
- 紅葉はどうみても緑にしかみえない。
- 洋服を選ぶとき、とんでもない色を選んだことがある。
- テレビの色の調節ができない。
- ピンクのスニーカーを水色だと思った。
- 緑の中にある赤い花が見えない（見づらい）。
- 乳児の便の色が判らない。
- 人の顔色の変化が見えない。
- 車の色を遠くからでは間違える。
- 「非常口」のランプは火事の煙の中ではかえって見にくい。